

3-1 第1回ワークショップ ー基調講演ー

(1) 開催概要

- ◆開催日時：平成28年 7月23日（土） 午後2時～4時
- ◆開催場所：豊島区役所本庁舎 5階 507～510会議室
- ◆講師：三菱総合研究所主席研究員 松田智生^{まつだともお}氏（日本版 CCRC 構想有識者会議委員）
- ◆講演：『ピンチをチャンスに変える生涯活躍のまち～いつまでも輝けるひと』
- ◆次第：
 1. 開会挨拶
 2. 基調講演
 3. 質疑応答
 4. 閉会挨拶

(2) 講演内容

移住・交流を進めていくなかで、重要となるいくつかのキーワードについてお話しをいただきました。

◆脱・元気の出ない四字熟語

最近、「消滅都市」、「介護難民」、「熟年離婚」等、巷には元気の出ない四字熟語が目立っています。しかし、今求められているのはその解決策です。具体的に何をやるかというアクションを起こすこと、それがピンチをチャンスに変えるということです。日本は26%の高齢化率（世界で1番目）ですが、果たしてこれが悪いことかという、私はそうではないと思います。なぜかという、海外からの観光客、あるいは三菱総研に在籍する外国人社員に聞くと、日本ほど「アクティブシニア」に溢れた国はないといいます。空港やホテル、商店街でこれほどまでに生き活きと働くアクティブシニアの姿に、外国人も驚くほどだそうです。シニア世代を「コスト」ではなく「担い手」として捉える逆転の発想が、これからは大きなポイントになると考えています。



◆50/55 問題

ピンチをチャンスに変えるというなかで、ピンチは何でしょうか？現在、日本は税込55兆円で、医療費に40兆円、介護給付費に10兆円という現状です。これは、月収55万円の人が医療費と介護費に50万円を使っているイメージになります。恐らく豊島区も秩父市もこの財政状況と同じになることが想定されます。税金は限られているが、医療費と介護費は増える。ピンチというのはこのことです。これが「50/55 問題」です。

それを解決するのが、『生涯活躍のまち』です。消費、雇用、産業を興し、税金を増やすことだけでなく、医療費の抑制も可能になります。社会参加や生涯学習、健康支援を徹底すれば医療費は抑制できます。実は医療費というのは、市町村では3倍から4倍も差がある。ピンチをチャンスに変えるというのが、今回の話でいうところの、50/55 問題を解決するということ。それが、生涯活躍のまちということになります。

◆「生涯活躍のまち」をめぐる誤解や先入観

生涯活躍のまち（日本版CCRC）は、アクティブシニアを中心に地域社会と連携してまちが活性化するというモデルです。ただ、これは国やマスコミの伝え方にも問題があったゆえに、大きな誤解や先入観があります。

まず、主語の問題です。国の提言の主語が「東京の介護が大変だから地方に移住しましょう」と聞こえてしまうことです。それでは前向きな動機になりません。「秩父が輝くためには首都圏のアクティブシニアとどう連携するか」など、「私が」輝くためにこれからのセカンドライフ、セカンドキャリア、住まい方はどうするかという、自分主語か地域主語にしていないというところに課題がありました。

二つ目は、根強い「姥捨て山」のイメージです。介護者が住むのではなく、元気な人が交流する、そして、二地域居住や将来移住につなげていくことが、生涯活躍のまちの本質になります。

三つ目が、高齢者が移住すると、逆に高齢化が進むのではないかという誤解。そうではない。今の地域の課題は何かというと、私は雇用尽きだと思います。雇用がないから若者が出ていくわけです。けれども、今回話すアクティブシニアタウンを作れば、様々な雇用が生まれます。だから、若年層が出て行かず、働き盛りがくる。逆転の発想というのは、アクティブシニアをもってして若年層や多世代を呼び込むということです。

◆両自治体住民へのメリット

移住・交流において、移住者だけがハッピーでいいのかという問題がある。移住した、あるいは二地域居住している豊島区民だけがハッピーでいいという話ではないでしょう。今回の移住・交流を通じて逆に秩父市民の方が生きがいを見つけられるようなものになることが理想です。北海道の浦河町という小さなまち、「移住お助け隊」というものを町民が作り、このようなまちとまちとの交流が町民の生きがいや健康につながっています。

健康寿命が延びることにつながれば医療費を抑制できる、産業も単なる老人ホームではなくて、色々なビジネスが生まれるでしょう。そして、学校も少子化でこれから子どもが減るかもしれません。そういったときに、アクティブシニアが学校でもう一回学ぶ。そして、学んだことを地域に生かす。さらに、アクティブシニアの経験や知見を子どもたちが学ぶ、一緒に体験するということが多世代共生のメリットにもなります。

また、このような秩父市民・豊島区民の両方のメリットを「雇用で〇〇万円、住民税で〇〇万円」など、数値で示すことが大事でしょう。

◆どのような「CCRC」が考えられるか（事例紹介）

◇趣味型CCRC◇

趣味を確保したモデル。釣り大好きで全国を回ったのちに高知を選び、東京から移住したというケース。今、彼と『高知版生涯活躍のまち』を検討中。日本中の釣好きを集め大会を催したり、すし屋を作ってそこでとれたてのすしを提供する。さらに、そこから観光客を呼んで地産地消したり、または外に売ったりすることでお金を稼ぐ。

◇転勤族の恩返し型CCRC◇

東京生まれ東京育ちだが、支社長として4年間長崎に赴任。その後、早期退職し4年間赴任した長崎に恩返しをしたく移住を決意。長崎では、地元の大学職員として働くだけでなく、同大学の野球部のコーチも担っている。また妻は東京にいるため別居中だが、年に数回会える時に「嫁のありがたみ」を感じられ、逆に仲が良くなったという『ハッピー別居（卒婚）』例でもある。

◇大学連携型CCRC◇

これは、破綻寸前だった大学が、敷地内にシニアの住まいを作るとともに、シニアの大学を作った。入居条件は年間450時間以上授業を受けなければいけないというもの。そこも、今やウェイティングリストができるほどの人気大学となり、シニアが学生向けに、あるいはシニアがシニア同士で教える授業が人気を呼んでいる。例えば、豊島区にある立教大学や教育機関が秩父に分校を作ってみてはどうか。

◆アメリカのモデルとの違いは何か？

移住・交流を進めていくうえで大切なことは、アメリカのいいところを生かして、日本の社会特性や地域特性に合ったものは何かということを理解することです。アメリカは、犯罪が多いため塀で囲われているけれども、日本ではもっとまちに開かれたモデルが適していると思います。住む人も高齢者だけでなく、そこに若者や子育て世代が住んだってかまわないわけです。新規に作るのではなく、日本はストックの宝庫です。公共施設、団地、移転したキャンパス、廃校、撤退した大型商業施設や稼働率の悪い旅館やホテルなど、ありとあらゆるストックがあります。それをうまくリノベーションすればコストも安く済みます。

「箱モノ」をつくるのではなく、ハードとソフトの仕組み、またそれを支える制度が大事となってきます。このようなモデルは、日本にも参考になるコンパクトシティ型のモデルです。まち丸ごとでCCRCのモデルとしていくことが、日本版CCRCにふさわしいのではないのでしょうか。

◆「生涯活躍のまち」を実現させるための提案

◇要介護度改善への成功報酬制度◇

事業者の努力等により、居住者の自立度や要介護度が改善されたら、その事業者に対して国が奨励金を出したり、あるいは法人税の減税をするという「健康インセンティブ」をするということ。

◇社会活動ポイント制度◇

もし、秩父のために50時間働いたら、または秩父で50時間学んだ等、元気なうちに地域に貢献したことがポイント化される制度。そのポイントは地域通貨や商品券など、自分の将来のために役立てられる。

◇第二義務教育制度◇

50代になったら、もう1回学校へ通う義務教育的な制度。内容もまちの課題や歴史を学んだり、体育の時間では転倒防止や骨粗鬆症を学ぶといったカリキュラム。

◇住宅の流通促進◇

もし家売る、買う等したときに減税、あるいは自宅をリノベーションする、そういうときに補助するといったものがセットになるということ。

◇逆・参勤交代制度◇

例えば経団連傘下の企業は、社員の1割を年間1か月地方で働かさなければならない

というアイデア。そうすれば様々な地域にオフィスができ、住宅もできる。またはレドロー号の運賃を安くしたり、移住割引をつくる。あるいは、ITの大容量のインフラを作って、パソコンを持っていけば秩父で仕事ができる。さらには、大学の授業をリモートで遠隔授業できるようなものが整備されるといったようなことも考えられる。

◆「わが街の生涯活躍のまち（日本版CCRC）」

◇名称：「〇〇〇〇ビレッジ」を皆で考えましょう◇

自分が住みたくなる、移住者が住みたくなる、「年賀状に書きたくなる」名称を！

- ・長瀬清流ビレッジ ・ひまわりビレッジ ・ワクワクビレッジ
- ・秩父酒飲みビレッジ・若ドシマビレッジ ・グリーンビレッジ
- ・カエデ、ヤギ、ウィスキービレッジ

など、講演会参加者の方々からユニークなアイデアを多数いただきました。

◆まとめ

今回の講演会でのキーワード

- ・前向きな解決策を出すことを意識しグループワークに取り組むこと。
- ・シニアは地域の「コスト」ではなく「担い手」である。
- ・「逆転の発想」ピンチの中にチャンスあり。
- ・「移住者」と「秩父市民」がともにハッピーになれることを忘れない。
- ・ユーザー視点のストーリー性とワクワク感。
- ・一歩踏み出す勇気と学んだ後にそれを活かす機会を積極的に求めていく。
- ・雇用や年収がどのくらい増えたかという経済波及効果と、それに向けた綿密な準備。

今日、2016年7月23日をターニングポイントに、つまりこの日をきっかけに秩父と豊島の新たな連携を一歩踏み出した日にしたい。その一歩というものは、一区民一市民、あるいは一職員が踏み出すだけでは小さい一歩かもしれませんが、今日ここに集まった志の高い人々が皆一歩踏み出せばそれは大きな一歩となると私は思います。今日、私の話したことが、皆さんの新しい気づきやこれから一歩踏み出すきっかけになることを願っています。

5. 質疑応答

講演を聴いた参加者の方々から、松田氏へ質問をお伺いしました。

○参加者（女性）

移住とは「裕福な人」が対象なのか。また、CCRC とは、収入が低く税金を落とさない人は受け付けず、若い子育て世代で税金を落としてくれる人がターゲットなのか。



○松田氏

非常に良い質問です。恐らく、今多くの方が思っている先入観でしょう。まずターゲットは裕福な人ではないかということですが、そうではありません。

シニアマーケットを見たときのピラミッドで言うと、上位の2割くらいの人たちは裕福でどこに住んでもやっつけていける人たちです。また、生活保護ですとか、介護、困窮層、あるいは本当に医療が必要な人は2割くらいいて、これは行政が救済する対象です。私が思うのは、6割を占める中間層の人々です。この層の人たちが元気に過ごして消費して、税金を納めて、社会保険料を納めて、経済波及効果を生み出すことが、先ほど申し上げた50/55問題を解決することにつながることを考えています。

○参加者（男性）

CCRC という話をすると、R(リタイアメント)の解釈で定年退職された高齢者の方が対象なんだという先入観が非常に強いと思いますが、リタイアメントというものを幅広く捉えて、子育て中の若い世代も対象になるという認識でよろしいでしょうか。

○松田氏

まさにそのとおりです。「住む人」というのは、米国ではリタイアメント・コミュニティですが、日本は多世代でやるべきだと思っています。例えば、ある土地に住んでいる方はシニアですが、農園にサラダファームという新しいベンチャーが入ってきて、それを運営しているのが若い人たちなのです。その周辺に若者の住まいが建ちはじめ、環境が良いから子育てにも良い。だから、子どもを連れて移住する。このように、アクティブシニアだけが対象ではなく、これは多世代のコミュニティだと言い切って構いません。

○参加者（男性）

シニアというよりも、まずは働き世代の 30～40 代の世代を取り込んでいくことが一番大事なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○松田氏

私も同感です。ただ、それには雇用が必要となります。今UターンやIターンで働き世代が移住をためらうのは、地元で雇用がないことが大きな要因です。ポイントは若手ベンチャーです。良いものを持っているのだけれど、彼らの悩みは商品の販路開拓や営業のチャンネルがないということ。例えば、農園で取れた有機野菜を地元で食べるのではなく、外に売って出たいというときに、東京のフレンチやレストランを知っているシニアは結構います。そうすると、直に販路開拓のサポーターになってくれるといったようなことも考えられます。雇用を生み出して、若い世代のサポーターとしてシニアが活躍していくことも大事なことだと思います。

○参加者（男性）

「事業主体の形成」というワードがございましたが、行政と事業主体との関係について何かアドバイスがあれば教えていただけますでしょうか。

○松田氏

そこも今回の肝です。現在、260 の自治体がCCRCに取り組みたいと言っていますが、共通した悩みは自治体が計画をつくっても「担う事業者が現れない」ということ。それは何故かということ、採算性がないからです。よって、行政は事業主体が健全に事業を回すためのサポートをしなければならない。それは、法人税の減税であり、あるいは頑張っている事業者に対しての奨励金や、共用部・レストラン・コミュニティスペースを作った場合に建設費を国が補助するなど、事業主体がやる気になるような仕掛けをつくるのが、自治体の腕の見せ所だと思います。

○参加者（男性）

お年寄りになってから、移住するというのは難しいのではないかと考えています。もっと若いうちからお試し期間のようなものを作った方が良いのではないのでしょうか。

○松田氏

私もそう思います。移住というのは就職や結婚と同じで、いきなり決められるものではありません。助走期間というものがない限りうまくいきません。年をとってからではなく、若いうちから様々な地域で住む、働くということを経験しておくことが大切でしょう。